

UIFA JAP●N NEWSLETTER

■主な内容

第3回ワークショップの報告

特集ザ・インタビュー -第12回日本大会名誉顧問の赤松良子先生にきく-

ドキュメント4 -第12回UIFA日本大会に向けて- (1997年7月7日~1997年9月6日)

海外交流の会

■第3回ワークショップの報告

今回のワークショップは第12回UIFA日本大会の見学場所を選定するにあたり、東京地区を墨田下町地区と世田谷山の手地区に分け各々2コース選定して見学・ワークショップを行った。

開催場所 本大会の基地となる、オリンピック記念青少年総合センター 国際交流棟 第2ミーティングルーム

見学先 グループ分けはくじ引きにより以下の4つとした。

Aコース-1 墨田区 京島地

-2 墨田区 清掃工場

Bコース-1 世田谷区 深沢環境共生住宅

-2 世田谷区 次大夫堀公園・民家園

参加者 会員 22名 非会員 14名 計 36名

10:15 中原会長の挨拶、山田規矩子プログラム担当委員より概要説明。

10:45 各グループ打合せの上、それぞれ出発。途中昼食をはさみながら見学を行い、15:00 帰館。

15:00~16:00 各グループによるワークショップ。

16:00 各グループの総括発表。 17:00 解散。

- 発表の内容
- ① 参加人数
 - ② 発表者
 - ③ 本大会の見学場所として適しているか
 - ④ どれ位の人数が適当か
 - ⑤ 見学時間
 - ⑥ 見学方法
 - ⑦ 特記すべきこと

A-1

- ① 8名
- ② 和田育子さん
- ③ 庶民の都市生活を見るという点で是非コースに入れたい街
- ④ 1グループ10名未満 全体で50名未満
- ⑤ 2時間位
- ⑥ 各グループ毎に先導者が必要
- ⑦ 事前のレクチャーが必要



ワークショップ受付



墨田区清掃工場



深沢環境共生住宅



グループ総括発表

A-2

- ① 8名
- ② 河原美津子さん
- ③ 時間をかけ、外国のお客様に見せる程のテーマ性がなく不適
- ④ 15名程度
- ⑤ 1時間位
- ⑥ 見学コースが小学生向けの設定であり、改良が必要
- ⑦ 清掃工場として最先端技術とは言いがたく、環境共生と結びつけるのは難しい

B-1

- ① 11名
- ② 六反田知恵さん
- ③ 都市の中で環境と共生するというテーマにぴったりのプロジェクトなので是非コースにとり入れたい
- ④ 10名位の少グループ 3組程度 (バス1台分)
- ⑤ 40~60分程度 (やり方による)
- ⑥ 各グループ毎に説明者をおく
- ⑦ 事前にレクチャーが必要

B-2

- ① 9名
- ② 阿部朋子さん
- ③ 日本の民家そのものが自然環境と共生しているので、見学コースとして適している
- ④ 20名位 2班に分割
- ⑤ 1時間位
- ⑥ 民家の保存と移築に関し専門的な説明が必要
- ⑦ "日本の文化を体験する"というサブテーマで日本茶、お団子、お酒等のおもてなしを考えるのもよい。

本大会の見学会をどう行うか実際に自分たちで見学を行って、それぞれの問題点が明らかになり、大変に有意義だったと感じた。本ワークショップの成果を踏まえ、コース設定についてプログラム部会でさらに検討を行うことにしている。

記録：プログラム・展示部会 高橋和子

■特集ザ・インタビュー —第12回日本大会名誉顧問の赤松良子先生にきく—

来年開催予定のUIFA第12回日本大会には多くの方々にご支援をいただいております。こうしたUIFAの恩人ともいべき方にインタビューをさせていただき、日本大会を成功させるべく、私たちの今後をご一緒に考えていきたいと思います。第一回は、UIFA第12回日本大会名誉顧問の赤松良子先生です。中原暢子会長と渡辺喜代美理事が赤松邸を訪問しインタビューをさせていただきました。迫力のある両先生および渡辺理事のディスカッションには大いに啓発されることと思います。9月下旬の昼下がり、都心の赤松邸でのインタビューをお楽しみください。



左. 赤松良子先生 右. 中原会長

中原：UIFAという組織は、フランスの建築家であるド・ラ・トゥールさんが女性であるという理由でAIAに入会を拒否された際に、女性だけの建築家の会をつくり女性の地位を高めていかなければと1963年にUIFAをつくったのがその始まりです。このようなUIFAの歴史を考えると、労働省局長時代に男女雇用機会均等法成立などにかかわってこられた赤松先生には是非お話を伺いたいと思っておりました。

赤松：私は女性だけの会というのはどんな世界においてもまだ必要だと思えます。必要なくなれば解散すればよいのであって、必要だと思う人が多くいるのであればやっていたいけばよいのです。世の中は女性の進出とか女性の地位の向上という方向に向かっているようですが、やはり揺れ戻しというか、いろいろふれがあります。今度の内閣も、ご覧になってわかるように6年前まで逆戻りしてしまいました。女性の閣僚が0、女性の政務次官まで0というのは、以前の宮沢内閣の時と同じです。宮沢内閣が出来た時に、私たち婦人団体は女性の閣僚が0とはひどいじゃないですかと文句を云いに行きました。世の中はこのように女性が活躍する時代になっている。政治の分野はあまりにも遅れすぎではないかと云いに行ったわけです。その時宮沢さんは「自分もそう思います。もっと女性を閣僚にすべき時代だと思えます。この次の時、もう少し自分がイニシアチブを取るようになったら、必ず女性の閣僚をつくらうと思っています」とおっしゃいました。次の組閣で森山文部大臣が出現し、まあそう嘘でもなかったと思ったのです。次の細川内閣の時は、女性の閣僚が3人、女性の政務次官も2人いました。その後閣僚は1人から2人、政務次官1人から2人と続きましたが、今度の内閣はあきれでもの云えないというか、とうとう誰もいなくなりました。まるでアガサ・クリスティの推理小説の題名みたいだけど、冗談じゃ

はないと思っています。そういうふうになんとなくと揺れ戻しというのがあります。

建築などは大いに女性に頑張っていたいただきたい分野ですから、さぞかしどんどん女性も進出していると思うのですが。

中原：数は明らかに増えております。しかし問題はその後で、始めは大学を出てともかく就職する。結婚しても亭主だけの時は良いのですが、子供ができると大半は辞めてしまう。始めはみな働きたがるのですが、なかなか定着していかないのです。

赤松：それは仕事の面白さというか、仕事を通して自分が感じる喜びと家庭、とくに子供を育てるときの大変さなどでバランスが崩れるんですよね。そこところが問題だと思います。建築に限らず仕事をする場合に、男性と女性が両方いたほうが良いと思います。できれば半々くらいが良いと、いっきにそうはいかなくとも初めは10%でも20%でもよい。とにかく0というのは絶対いけない。女性の眼で見た、あるいは女性の感性で感じたものが、反映しないような分野であれば、それはどちらでも良いと思うのですが、建築などは、絶対反映すると思えます。もちろん政治も女性の眼が必要です。他の分野でも女性の意見の反映の必要性の多い少ないはあると思いますが、女性が進出していないというのが現状です。これまでを振り返ってみると、一番面白かったのは、婦人少年局の仕事でした。女性が進出しなければ世の中はおかしいと、長く思っていました。まさにそのための仕事でした。これは面白くて辞めようなど一度も思ったことはありませんでした。私も結婚して家族が夫だけの時にはなんの支障もなかったのですが、子供が出来てからは大違いで、困り果てたこともあります。よほどの覚悟と体制と知恵が必要ですね。

中原：子供に手のかかる時期はそう長くはないのですが、目先の事が忙しいから、仕事がなかなか続かなくなってしまうのですよね。

赤松：仕事によっては二度と復帰出来ないものもあります。例えば国家公務員などは試験を受けてコースに乗るわけですが、一度辞めたら二度と再びそのコースに戻ることはできません。建築の場合はもう少しプロフェッショナルで専門的な知識で仕事をされますから、一度辞めてもなんとかなるのではないですか。

中原：分野にもよりますから一概には言えませんが、今の建築の設計というのはいろいろな知識をもってやらないとだめで、一人で考えただけでは出来ない。そういう情報に乗り遅れてしまうということがあります。よほど勉強していれば別ですが、すべて子供にかかりきりで、急に復帰しようと思っても難しいでしょう。休んだ期間くらいの勉強がいるわけです。個人で独立する女性の建築家の場合、何がつかいかというと、建築は一人では出来ない。小さな仕事しか取れないと小さな仕事しか出来ない。大きい仕事はなかなか女性に出来ないのです。

赤松：それはクライアントの意識ですよ。

中原：それと女性に対する信用度です。この人なら任せてもいい

という。

赤松：積み重ねですね。ある程度ね。

中原：昔よりは随分良くなったと思いますが、やはり女性は社会的に信用されていないのではないのでしょうか。

赤松：もちろんそれはありますね。弁護士にしても医者にしても、頼む側からすればお金もかかるし命もかかっている。大きな建築物などもそうです。そういうものを託す相手として女じゃという声もあることは確かです。それを相手が悪いとか旧いとか云うだけではすまない話だとは思いますが。

中原：こちらがやはりちゃんとしていて、たとえば大きな建築物の依頼を受けた場合は、一人では受けられないわけですから、組織を作るとか仕事の受け皿をきちんと作る力を女性自らが持たなければだめです。日本の国では残念ながら女性の建築家の歴史は浅く、一番初めのほうに属しているのは浜口ミホさん、設計同人の林雅子、山田初江や私です。我々が後輩に道を開いていってあげなければいけないのではないかという気がしています。ただ女性の地位を高めていくといっても実力がなければならぬわけですから、そのためには女性がある程度固まってやっていくほうが強いかと。そういう意味でU I F Aというのは個人的ではあるけれども、非常に力があると思っております。

赤松：オーガナイズするという事は、何であれ大きなことをする場合は絶対必要です。だから是非そのようにおやりいただきたい。若い方達には先輩の開いた道をより大きくしていっていただきたい。私は役所に長くいたのですが、女性で初めての何とかというのに何回かありました。ついこの間も女性で初めての事務次官というのが出ましたよね。これは官僚としてはトップの座です。それが出たということは戦後そういう道に女性が進めるようになったということが先ずあるわけです。1946年に初めて大学に女子が入れるようになりました。それまでは資格がないのです。司法試験も外交官の試験も女性には門戸を開いていなかった。受けられる資格は日本国の臣民たる男子と書いてあるのだから。それがなくなったのは憲法が新しくなった戦後のことです。旧制大学に入るにはそれなりの資格がいるわけで、男子は旧制高校を出ていけばよいのですが、女子は旧制高校に入らなかったのですから女子大とかの専門学校を出ていする必要がありました。私は東京大学法学部を出て公務員試験を受けました。1950年に労働省に森山さんが入り、私は1953年に入ったわけです。入った後は上級職の試験を通過すれば本省の課長くらいまでにはまあまあなれます。そのあと局長や次官になるのは同期生20人か25人のうち一人です。40年以上かかっていますが、それでも女性にそういう道が出来たということは良いことだと思っています。

私達は、各省にちらほらと女性がでてきた頃に、「あけぼの会」というのを作りました。各省に女性はまだ一人とか二人とかしかいないのですから、それをオーガナイズしたわけです。今では各省ほ

とんど女性が0ということはなくなりましたが。

中原：なくなりましたけれども事務次官まではなかなか。最後の一人ですものね。

赤松：だから、オーガナイズするわけです。優秀な人は多いのですが、そういう人たちが一生懸命仕事をし、実力も示してそして何十年かかかるといふことなのですよ。建築家の方だってほんとにトップクラスの建築家が出るには何十年かかかるといふ思いますよ。しかも先ほど述べたような揺れ戻しというものもあるし、安心はしてられない。

中原：底辺が広がって行くということが大事なことですよね。

赤松：底辺が広がってこそ高さというものも出てくるのです。よほど特別の天才的な人がいれば飛び出ることもあるのかもしれませんが。

中原：一人だけ出てきても、それで世の中がよくなるということはないのではないのでしょうか。やはり底辺を広げることです。世界にはいろいろな国があるので、できればその中で手を取り合って底辺を広げていく。そのひとつがU I F Aではないかと思っております。

赤松：その通りだと思います。

中原：先生には是非いろいろお助けいただきたいと思っております。

赤松：そういう国際的な会をおやりになると、皆の注目を浴びて、女性建築家がそんなに沢山いるのか、いい仕事もやっているのか、是非頑張ってもらいたいと思う人も増えると思いますよ。残念なことに日本は経済力はつきましたが、どうも女性の意見の反映が少ない。立派な建物は沢山建ったが、女性の建築家が設計した建物は少ないのではないですか。来られた方達にこれは日本の女性が設計したのだといえる建物があるといいですね。

中原：いくつかはございますが、数多くはないですね。

赤松：今後もっと増えることを期待しております。

渡辺：大きな建物を設計する女性の建築家の数は少ないかもしれませんが、例えば社会の高齢化に応じて社会や街や建物はどうかという観点から良いかということになってくると、かなり女性達が色々な意見を持ち、色々な働きをしていると思います。ユニバーサルデザインとかバリアフリーあるいは現場の問題ということになると、活躍する女性の数はどんどん増えてくる。超高層など大きな建築物の設計に関しては男性中心が多いけれど、やや人の暮らし向きに近いところでは女性達の活躍が増えているということは云えると思います。

中原：官公庁でそういう仕事をしている女性も増えていきますよね。

渡辺：今まで男の人たちが知らないふりをしていて、手を抜いていた分野が今とても重要な分野になっていて、そういうところに女性の眼が向き始めている。

赤松：重厚長大ばかりに価値があるのではないということも、ひとつの世の中の流れとしてある。平和な、高齢化社会にむけて老人が暮らしやすい生活環境を作るというふうには世の中は向いていって

る。女性に期待する側面が増えているとも云えるでしょうね。

渡辺：そのように向けていくことが、UIFAのようなインターナショナルな会の役目の一つなんじゃないかと参加して思っています。

立派な大きな建物を作ることも目指したいことではありましようが、

赤松：たぶんひとつは女性は、都市計画とか高層ビルとかそのように大きなものは向かないのではないかという考えがありましよう。そうでない場所でしか働く場がなくてもいいのだというのは賛成できません。そういうすごいことだってやったらいいんですよ。

中原：すべてにおいて機会均等であるべきだというのは確かですが、

赤松：しかし生活者の視点とか、老齢の人の暮らしやすさとか、そういうことに女性の視点が近いということは言えます。

渡辺：そういうことを混ぜ合わせた都市の運営をしてこなかったということも実はあります。そういう面も混ぜ合わせて都市を作っていくともう少しましな都市になっていくであろうと云うことはあります。女性の持っている感覚というのはそういうところではものすごくいい働きをするのではないのでしょうか。

赤松：そこところは異論のないところですが、すごい、どかんとしたものは女に向かないと言われるとちょっとね。

渡辺：それにも女の眼を入れないと良くないですよという考え方もあるのではないですか。

赤松：どかんと大きなものに向いている女性もいると思います。ものすごい大きな建物をつくるのが好きだという女性がいたらそういうところでその能力を生かすということも大事なのではないですか。

渡辺：女はなにになにに向かないという発想自体が、そもそも差別というか区別をつけることにつながるのです。

赤松：それもひとつありますが、女性が今まで多く接してきた分野というのは普通の生活ですよ。多く接触してきた分野における長所というのも一方にはあるのだと思います。それを生かすということも別の論点としてあると思います。なにも否定する必要はないのです。例えばちょっとした普通の住宅を建てる場合には、女性の設計したものの方がずっと使い易いという説もあります。

中原：ありますが、これもなかなか男女を問わず個人差があるところではあります。もちろんそういうところに適している女性は沢山いるとは思いますが。

赤松：それは数としては多いのではないですか。

中原：多いほうがもちろんいいと思いますよ。女性でなければ出来ない仕事、女性では出来ない仕事と区別するのもよくないですが、女性が非常によく出来る仕事は女性がやればいいのではないかということはありませんね。

赤松：今までの社会は女性をある意味で押し込めていたわけですが、そこからはみだしていこうとするのだから、向かないとか向くとかいわれるのは困るのですが、今まで暮らしてきた暮らし方が生かせるような分野があれば、そこは強みなのですから、その強みを否定することはないと思います。

中原：おっしゃるとおりです。ところで「内助の功」という言葉がありますが、今もそういう社会進出はしないかもしれないがある意味で重要な役目を担っているかもしれない女性はいます。それについてはどう思われますか。

赤松：今までそういう女性が果たして来た役割りを否定するつもりはありませんが、これから21世紀に向けて、家の中だけで一人の夫とせいせい一人や二人の子供だけのために女性の全エネルギー、全時間を使っていいとは思えない。そういう贅沢はもう許容できない社会になっていくと思うのです。日本では老齢化と少子化は間違いなく進みます。労働力の割り合いはどんどん減る傾向にあります。20年くらい前は定年は55才でした。女性は大きな会社では50才でしたが、なんで男性は55才で女性は50才なのと私は思った。最高裁でそんなのいかんと云われたのはほんの少し前の話です。結婚退職制と定年差別というのはほとんど同じころ、確か昭和46年だったと思いますが、判決があって結婚退職もいかに、年齢差別もいかに、と裁判所が判断した。その後だんだんに高齢化が進み、55歳の定年じゃあいかんというので、労働省も一生懸命定年をのばそうと、男性の定年は60才になり女性も60才になったのですが、年金が65才になったんですよ。年金はそれ以前には女性55才、男性60才だったんです。年金が違うから定年も違ってもよいという理屈だったわけですが、年金も一緒にすべしというので変わったわけです。それは当然の成行きだと思います。人生50年のときと人生80年のときと定年が同じだなどというのはばかげています。ところで年金をもらう人はどんどん増え、保険料を払う人は減る。このバランスは明らかに21世紀にはものすごい勢いで変わります。税金も同様です。これは女性が家において、税金を払わない、保険料も払わない、他の人に払わせている、他の人の犠牲において福祉を受けているというような贅沢はもう21世紀には無理になるということです。女性が家庭に入るということが社会的にも経済的にも成り立たなくなるのではないですか。そのような幻想は止めていただいて、働いていただく。意味のある働きをしたいと誰でも思うと思うが、それであればきちんとした知識を身に付け、仕事の積み重ねをしていくほうが良いのではないですか。

中原：先生のおっしゃることには大いに賛同します。ところで若者の労働意欲が変わってきたのか。日本の将来に不安を感じるのですけれど。

渡辺：東京都の場合、皆よく働きますよ。入ってくる人の約半分ぐらいは女性です。試験制度だし、面接で民間ほど差別がないから入ってくる。民間に男性優先の傾向があるのは現実です。それで労働意欲が削がれてしまうということはあるかもしれません。

赤松：それから、入ったあとで辞めていく女性が多いのも残念なことだと思います。原因はチャンスが平等でないということと、家庭の責任を男性が果たさないこと。例えば総理府の報告書「男女共同参画の現状と施策」(平成9年7月)によると、日本は経済的な指

標では世界第3位にもかかわらず、ジェンダーという要素を入れ、政策決定への参加などを加えるとずっと下がって、先進国とひとひ格差ができてしまう。それは、国会議員の女性の少なきなどに象徴されるのですが。さらに、日本では男性の家事への関わり方が極端に低く、一日に31分、もっとひどいのは週に20分なんていうデータもありました。よその国よりずっと少ないのです。女性の方の割合は国際的にそんなに格差がないのに、男性の仕事の時間が他国より長く、家事にかかわる時間が極端に短いというのです。しかも、妻が働いていようがいまいが、男性の家事時間はあまり変わらない。中原：まずいことに、妻もまた自分が家事を全部やるのが普通だと思っています。

赤松：そんなことでは女性に負担がかかりすぎて、よっぽど強靱な人でない限り続けていかれない。松原亘子さんのように子供二人育てて、次官になる人もあると言うかもしれないけど、平均したらそうはいかない。どうしたって辞める人は増えるわけです。男性の家事の負担が少ないということをもっと言うべきだし、またそれを許しているのも女性だということを考えなければいけない。21世紀は、女性が家にいることに意義があるなんて言える時代ではないのだから。

中原：本当にそれを言いたいですね。

渡辺：高齢化、少子化社会になり、今までの生活を支える基盤がなくなった時に、本格的な平等の概念が発火するのでしょうか。

赤松：女性が声を上げて騒がなければあまり変わらないでしょう。

中原：女性が堂々と自分の意見を言い、自分で覚悟しない限りは平等になりませんね。意識を変えていくには時間がかかりますし。女子大の住居関係の学科では、内容は建築学科とあまり変わらないけれども女子学生の意識というのが若干違うように思います。

赤松：違いはあって当然です。無理に合わせることはない。だけど、大きいものが好きだっていう女子がいるかもしれない。私だって、子供の時、男の子と遊んでばかりいました。戦前の軍国主義の時代ですから女性の権利なんて誰も教えてくれなかったけれど、相撲とったりしてました。おままごととか人形とか嫌いだったから。そういう子もいますから、それはそれで伸ばしてやればいい。つぶさないように周りが支えていかなければいけない。

中原：それがUIFAの役目だと思うのですね。今回の大会のテーマが「環境共生時代の人・建築・都市」ですけど、人を育てる環境についての先生のお考えをお聞きできたと思います。私は1963年のUIFA第一回大会から出席したのですが、その時女性だけの建築家の会があったのは日本だけでしたので皆さんがびっくりなされたんです。私はPODOKOという会の代表で参加しましたので。

赤松：私は、1963年頃は国連のフェローシップでアメリカで勉強しました。テーマは「技術革新と女性の労働」。いろんな町を旅してオートメーションの影響が女性の労働にどう影響を与えているかを研究しました。オートメーションによって筋力の男女

差が解消されるわけだから、労働の男女差は消えていく。機械化と並行して経済発展が進んだから、機械化による雇用人数の減少もおこらなかった。銀行業務の拡大を見ればわかるように、経済規模が拡大されたのです。女性の高学歴化が進み、今は短大に行く女性が減っていますね。学科の選び方も変わってきて、私の時は法学部800人中、女性は4人でしたが、今は国立大学の法学部で女性が半数というところもあるそうです。ところで、建築に関するところで今までに私が特に興味をもったのは、老後の住まい方についてです。渡辺：先生は都市居住派とうかがいましたが。

赤松：ニューヨークにいた頃、ご老人が一人でアパートに住み、買い物でもコンサートでも便利に行っているのを見て、年とっても芝居やコンサートに行かれる都市に住みたいと思いましたね。東京はドーナツ化現象がおきて都心の人口が減っていますから、そろそろ逆風が吹いて人が戻って欲しいと思います。都市に住んでいるほうが文化の吸収という面でいいですよ。ヨーロッパのように夜の9時頃まで美術館が見られるようになると、もっといいですね。

中原：都心居住はお金がないと出来ないのが現実ですね。適当な値段で都心に住めるようになったら、ずいぶん都市は変わるでしょう。そういうところからやりたいですね。

渡辺：今日は様々な側面からお話し頂きましてありがとうございます。“今なぜ女性だけの会議を開催するのですか”という問いへの答えが、今までのお話に含まれていますね。さて最後になりましたが、先生は今後どのような活躍を考えていらっしゃいますか。

赤松：60歳まで働いてきましたから、多少自由な時間も欲しいですが、同時に死ぬまで貢献ができる人生でありたいと思います。特に女性の地位についてやってきたから、今までの延長で貢献できる事をしたい。願わくばインフルエンサーも持ちたい。実は9月15日に、京都で、くれない塾の「変えなきゃ日本、変えるのは女性」という会議をしましたし、明後日は北海道で「女性労働の今日」という講演をしますが、適当な場がないと犬の遠吠えのようで寂しい感じがしますから、そういう場があるといいなと思っています。

中原：長時間にわたり、たいへん貴重なご意見をお聞かせいただき有り難うございました。

(記録・写真担当：田中・大高)

赤松良子先生

現在、文京女子大学大学院教授。財団法人びわ湖ホール理事長。昭和28年労働省入省。国際連合日本政府代表部特命全権公使。労働省婦人局長。ウルグアイ駐箚特命全権大使等を務める。

1993～94年文部大臣。

中原暢子会長

現在、東京家政学院大学住居学科教授。

林・山田・中原設計同人主宰。

■ドキュメント4 ー第12回UIFA日本大会に向けてー

(1997年7月7日～1997年9月6日)

- 7月7日 岩手県建築士会女性委員会と懇談。
- 7月15日 日本建築学会・地球環境本委員会の下に「環境と女性小委員会」設置、学会との共同事業実施の一環となる。主査小川信子氏
- 7月19日(2時～5時) 第6回実行委員会、カムライツ7館。18名
総務部会 第7回支援体制の構築。P.C.O(会議運営会社)に見積依頼。協賛金等の事務取扱に関して。プログラム部会(7/13)第13回ワークショップ墨田下見。大会プログラム案、発表テーマ案、横浜公開シンポジウム案について。おもてなし部会(7/17)エクスカージョン案下見及び検討。広報部会 第9回(7/6)2nd.サーキュラ検討。日本建築学会、JIA大会配付のためのチラシ検討。
- 7月20日 トステム財団に助成申請郵送。
- 7月28日～29日 第7回実行委員会等のお知らせ発送(事務局)
- 8月15日 9/6開催のワークショップお知らせ発送(事務局)
- 8月18日 ㈱東京建築士会女性建築士委員会寺本晰子委員長より日本大会参加依頼あり。日本大会参加希望票合計120名(国内78/海外42)内、パネル展示希望者21名(国内12/海外9)
- 8月23日(10時～12時) 第7回実行委員会、カムライツ7館。26名
連絡部会(8/7)松川・山田・船津・井出・板東 2nd.サキア案検討
総務部会 第8回支援体制の構築(後援名義等・募金活動状況・助成金申請)。会議運営会社(P.C.O)への委託検討。寄附金等の受け皿検討。中国の参加について。プログラム部会 第6回(8/7) 第3回ワークショップ、展示会について検討。8/15墨田区訪問。8/18㈱東京都公園協会訪問。おもてなし部会(8/18)両国水上バス打合せ。広報部会 第9回(7/19)チラシ作成と活用法。2nd.サキア案。第10回(7/28) 2nd.サキア、チラシ試案作成検討。
- 9月6日(10時～17時) 第3回ワークショップ 国立オリンピック記念青少年総合センター。スタディツアーの候補地検証。会員21名・非会員13名参加。

■役員回の報告

- 第4回役員会(97年7月18日6時30分～)役員10名出席。
- 第5回役員会(97年8月18日6時30分～)役員12名出席。

■海外交流の会

去る8月23日(土)、会員29名、非会員11名の参加を得て、オカムラ・インテリア館にて、第13回海外交流の会が開かれた。

講師のスリランカ大使夫人、チャンドリカ・ナワラットナラージャさんは、コロomboのモラトワ大学の建築学科に学ばれた後、ローマ大学の大学院で遺跡保存について学ばれた経歴の持主で、シンハラ語、英語、イタリア語、フランス語に堪能な大変なインテリである。

今回の海外交流の会では、スリランカの住宅について話して下さいとリクエストしたが、ここ10年近く国に帰っていないので状況が分からないとのこと。それならご専門でもある、故国の遺跡について紹介していただこうということになった。

スリランカは北海道を1まわり小さくした位の大きさで、その中にユネスコの世界遺産に登録された遺跡が数多くある。シンハリ王朝最古の都アヌダプーラ、ブッダの涅槃像で有名なボロンナルワ、岩山の上に宮殿が建てられていた古代都市シギリア、木造建築の多い都市キャンディ。どの都市も人口湖による治水と、建物に池やプールを効果的に使っているのが特徴だ。OHPとスライドを使っての説明は時間が足りない程で、スリランカという国は、日本にはあまり知られていないが、遺跡の宝庫という印象を受けた。

これらの遺跡をゆっくりまわるにはスリランカ国内だけで8日必要だとのこと。「みなさんで、こられる場合は建築のわかる人をガイドに手配しますから、言ってください」との大使夫人の言葉にその気になった会員も多かったようだ。

東 由美子



スリランカ大使夫人



会場風景

■英会話教室開催のお知らせ

すでにお知らせの通り、10/11(土)よりUIFA日本大会にそなえ、英会話教室が開催されます。日本大会をささえ、海外交流を行うのに欠くことの出来ない英会話、この教室に是非ご参加下さい。申込みはUIFA JAPON事務局まで。

■広報だより

秋も深まり 樹木の紅葉も一層と彩やかな季節となりました。

特集 ザ・インタビューの第1回をお届けします。仕事を続けること、知識を身につけること、行動すること、発言すること、オーガナイズすること、そして生涯社会に貢献できること、UIFAに対する提言は又、会員一人一人に対する課題とも受け取れる貴重なご発言でした。ザ・インタビューは継続して行う予定です。ご期待下さい。

担当：飯島、川嶋、渡辺、柏原、田中、大高、緑川